
狼になりたい

優美香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼になりたい

【Nコード】

N7274Z

【作者名】

優美香

【あらすじ】

クリスマスイブの夜に、母を亡くしていた少年は。

いつからだろう。

俺には走ることしかなかった。

走ることだけしか考えたことがなかった。いや、走ることしか頭に「わざと」置いていなかった。

五年前のクリスマススイブの夜、母が交通事故で死んでしまっただらかもしれない。毎年、決まりきったように十二月は変わらずに巡ってくる。

十二月は大嫌いだ。

浮き足立つ人の群れや、急に色めく街の景色なんか心の底から大嫌いだ。世界中で俺の母親が亡くなったことを祝ってんのか。神様なんかいやしねえよ、いるんだったら母ちゃん返してくれ。頼むよ神様。

どんなに欲しくても手に入らないものがある。それを嫌というほど分かせてくれる「世間」というものを俺は知っている。

「雄司はね、走っている時が一番カッコいいよ。おかあさん、それ大好きだよ」

玄関で靴を履いたときに母から声を掛けられた。

「試合は夏だよ？ それも来年の？」

「いいの」

「そう」

振り返ると、母はにっこり笑っていた。試合というのは毎年八月に行われるジュニア・トライアスロンの選手権のことだ。

十二歳になったばかりだった俺は、その年の夏、初めて出場してみた大会で二十位の成績を収めた。まぐれだったとしても、嬉しかったのには変わりない。来年の夏は、もっと頑張ろうと心に決めていた。

「あんたって本当に走るのが好きなんだね」

「まあね。俺、頭悪いじゃん」

「まあ」

うそぶいて笑う俺につられて母は笑った。そして、こう言ったんだ。

「雄司はね、走っている時が一番カッコいいよ。おかあさん、それ大好きだよ」

朝から台所の大掃除をしていた母はすっぴんで、ぼさぼさの頭だった。だけど、俺の顔を見ながらにこにこ笑って「いってらっしゃい」って言ったんだ。

俺は、その日に限って「いってきます」を言わないで家を出た。母親と交わした会話は、それが最後だった。

俺は永久に「いってきます」を母親に言い直す機会を失った。俺と父が好きなホール型のチョコレートケーキを買ってくれた帰り道に、母は飲酒運転の車に撥ねられ死んだ。即死だった。

まだ暗くなっていない時刻だったのに、酔いつぶれたまま車を運転していた男のせいで。

俺と父の人生からもぎ取るように、クリスマススイブは神様に母親を返した。

歩道の上でぐしゃぐしゃに潰れていたケーキの箱を、俺と父は泣きながら片付けたことを憶えている。

今年も駅前の街路樹は、夜空に負けじと赤や緑の電球がピカピカ光っている。その下のタクシー乗り場では嬉しそうに見つめあう恋人たちが並ぶ。毎年のように変わらない光景を、こいつらの心なんか潰れてなくなっちまえと俺は呪う。

クリスマススイブなのに、そんなこと考えてた俺は自分を呪う。

道すがら、頭を振って涙がこぼれそうな気分を立て直す。さつきまで、スイミングクラブで10キロ泳いでいた。とにかく早く家に帰りたかった。

駅前のタクシー乗り場の横の道を真っ直ぐ歩き、二つ目の大きな角を曲がると俺と父が住んでいる市営住宅がある。夜になると柄の悪い人間が増える嫌な場所だ。酒臭い息の男と女が、急に狭い路地から出て来ることもある。

「やあだあ！ やめて！」

急に聞こえた女の声の方向を、俺は見ようともしていない。いつものことだ。

「いやあ！」

「そんなこと言ってるけど、ほんとは違うんだろ」

「違います、違うから！」

下卑た若い男の声が何人か分と、ひとりの若い女の子っぽい遣り取りのようだった。俺は足早に路地を通り過ぎようとする。面倒は御免だ。

不意に俺の左側から、その女の子の必死で叫ぶ声が聞こえた。

「ヤダって言うてるでしょう！？ ゆ、雄司！ ねえ雄司ったら！」

えっ？ 俺の名前、もしかして呼んでる？

左側を見ると、まるで真っ赤なアゲハ蝶みたいな女の子が小走りですり寄ってくる。ふわふわした黒くて長い髪と、真っ赤なトレンチコート。輪郭の整った小さい顔と、大きめの切れ長の眼。コートの色と同じように自己主張している口紅。

「……だ、誰？ おまえ」

半分言いかけて言葉を飲み込んだ俺は、彼女の後ろにいる三人のゴロツキ連中の視線を感じた。

「なんだよ彼氏かよ」

「畜生」

「でも一人だけだぜ？」

最後の一言で何故かキレそうになった。だからなんだってんだ？ しかも俺は腹が減っていたこともあり、異様に苛々していた。女の子を背中に隠し、そいつらに顎を上げて告げる。

「悪い。俺、こつ見えてもアマチュアのライト級ボクサーなんだけど」

口から出まかせに決まってる。でも、そいつらをビビらせるには効果はあった。背丈こそ普通だと思いが、長距離を走るために日ごろからストイックに減量もしていた。それに普段から、周りの人間からは何故か「雄司は目つきが悪い」と言われている。

当の俺にとっては嘆かわしいことだが、腹が減っている時の「目つきの悪さ」は、当社比十倍の威力があるらしい。理不尽な顧問に「態度が悪い」と怒鳴られるのは決まって空腹の時だ。

「ちえっ。飲み直そうぜ」

「そうすつか」

ゴロツキたちが口々に言って背中を向け、スナックへと歩き出す。見届けた俺は、自宅の方へ向かって再び歩く。背中の方で、小さなため息が聞こえた。もうすぐ市営住宅の敷地が見える頃だ。後ろから弱々しい声がしてきた。

「あおう」

「なんだよ？」

「こつち向いてくれない？」

「……チッ」

舌打ちをしてから振り向いた俺は、改めてぎよっとした。やっぱり同じクラスの女子だ。化粧をバッチリ決めて派手な格好をしているから、道理で分からなかった訳だ。

「なんだよ」

「あ、ありがとう」
「いいよ別に」

視線に困る。トレンチコートの下では、V字型に大きく開いた素肌がまぶしく光っている。冬だっつーのにそんな格好してっから絡まれるんだ。ちょっと指を入れて横に開いたら、おっぱいが丸見えだ。そんな力カトの高い靴も、歳に似合わず見える原因のひとつなんだぞ。おまえ自分のことを自覚してないだろう？

マシンガンを乱射するように言いたいことはたくさんあった。だけど、やっぱり言えないから押し黙るしかない。

「聞かないの？」

「なにを」

「どうしてあんなところに、って」

「聞いても仕方ねーよ」

今度は彼女が黙って俯いた。泣きそうちに肩が震えている。

「父ちゃん絡みか」

「うん」

ぼそつと一言、まるで投げるように返事をした彼女はメソメソと泣き出した。

「わたしだって、行きたくなかったのに。パパの代理でって、どうしても。怖かったのに。怖かったのに」

「わかったよ、わかったから」

わかりやしねーよ本当は。だけど、しゃくり上げながらいつまで

も泣き止まないんだコイツがよ。

駅から十分ほど歩いたところにある大きなホテルから、柄のよろしくない狭い路地を抜けると確かに住宅街への近道にはなる。

年末だから、社会的に偉い人はあちこち呼ばれたりするんだろう。地元だし。

ダブルブッキングもあるかもしれない。

誰でも知っているいわく付きの後妻よりは、実の娘が顔を出す方が宴会の主催者も喜ぶかもしれない。

なんてったって、こいつの親父は国会議員だもんな。

だけどさあ。

こういう時に、なんて言っているのか。

女の子に目の前で泣かれるなんて十七年間の人生で、初めての経験だし。

不意に、同じ部活の同級生のことを思い出した。俺とは正反対で、底抜けに明るくて何故かム力つく男のことを。俺はいつまでもポロポロ涙をこぼす彼女の肩を叩く。あいつならどうするんだろう。

多分、うまく慰めてやれないけど、ま、いつか。

「泣くなよ。親の代理だったらしょうがないよ、それに。ほら、結局なんにもなかったんだし。いいじゃん別に」

「でも行きたくなかったんだもん」

「わかったから」

ぼんぼんと肩を叩かれて、ようやく泣き止んだ彼女は顔を上げた。

「ありがとう」

「いいよ別に。つつか俺、なんにもしてないから。送って行くところ？」

「いらない」

「どうして」

「多分、母の友達が大勢いるから。夜通しなのよ？ 信じられない。だから帰りたくない」

「はあ？」

「やっぱりわたし、ホテルに戻る。そこで寝るわ」

「んなこと言っただって、金あんのかよ」

「なんとかなると思う。タクシーもすぐに来るわよ、きっと」

「母」と言った時から彼女の眼は、意志を持って生きることを知っている。「いつもの彼女」に戻っている。父親を「パパ」と呼び、後から来た人は「母」と区別してから。

苦痛な空気の集団よりは、誇り高い孤独を選び続けてきた女。

こいつは俺と同じ匂いがする。

「しょうがねえな。俺んちに来る？」

「いいの？」

きれいな顔がほころぶ。花が咲いたみたいだ。

「金ならなんとかなるって。そんな言葉、あんたには似合わねーと思う」

困って頭を掻いた俺を見て、彼女が笑った。

家に帰ると、父が鉄板焼の準備をしてくれていた。母が亡くなつてからは毎年、そうやってクリスマススイブを過ごしている。

「おじゃまします」

大人びた印象の美人が俺と一緒に茶の間に入ってきた時、父はホットプレートの前でビールを噴き出しそうになった。

「こんばんは」

「あ、ああ。こんばんは」

父がキョトキョトと目を泳がせるので「同級生だよ」と言った。

「そうなの？ いつも雄司がお世話になってます」

「はじめまして。横山です」

さすがに初対面の人の前での微笑み方や声の出し方は慣れているもんなんだな。すげえな、コイツ。

コタツに入っていた俺は、二人を見比べてニヤニヤしてしまう。

「さ、食おうか。腹減った」

「そうしようか、横山さんは嫌いなものある？」

「いいえ。全然」

テレビのニュースを低いボリュームで流していた俺たち三人は、会話を交えながら台所に立った。父は元来サービス精神が旺盛な人だが、美人の前だと特に張り切っているのが面白い。

「安い肉でごめんね。横山さん、いっぱい食べなよ？」

そう言いながら、どんどんホットプレートに載せていく。俺もガ
ンガン食べた。食べながら

「あっ」

思わず声を上げた。

「どうした雄司？」

父と横山が不思議そうな顔をする。俺は立ち上がって台所に父を
呼んだ。

「なによ」

俺は小声で言う。

「あのさ。家にもう一組、布団あった？」

「あ」

客なんか泊まりに来たことがない我が家の人間、……つまり、俺
と父の二人なんだけど……客用の布団を用意しておくという考えは、
今まで全くなかったのだ。

「じゃあ俺、コタツで寝る」

俺がそう言うと、父は「おまえが俺の布団に寝て……」と言いか
けて途中で止めた。

ん？　と思って振り向くと、横山が俺の後ろに立っている。

「わ！　びっくりしたなあ、もう」

「わたしがコタツで寝る。急にお邪魔してしまったんだもの」

男二人はブンブン首を横に振った。

……結局。

横山は俺の布団に仰向けに寝ている。俺？ 彼女の隣に並んで仰向けになって寝ていた。アジの干物みたいに行儀良く並んでる。

自分の心臓の音が聞こえた。

いい匂いがしてくる。しかし寝れねー。横山が寝ついたらコタツに移動すっかな。股間がパンパンに膨張している。参ったな。

俺は天井を睨む。

「ねえ」

横山が小さな声を出した。

「え？」

「今日は、ありがとう」

「そんなこと、いいよ」

「うん」

こそっ、と羽のような軽い動きで彼女が体ごとこっちを向いた。

「ありがとう」

「もういいったら。寝ろ」

横山のかすかな息遣いが聞こえる。

「わたしが雄司のこと、好きだって知ってた？」

「え」

「……誰にも媚びないで、一生懸命で、すごくひねくれてて、目つきも悪いけど、ほんとはすごく優しいの」

股間と心臓が破けそうだ。ほんとに同時に破けちゃったらどうしよう。

「ず、ずっと。ずっと知ってた。一年の時から、ずっと」

「そう……」

「うん。おやすみなさい」

寝返りを打った横山は、大きなため息をつく。
俺は深呼吸をしてから言った。

「あ、あのだ」

ヤバイ。声がかすれてる。

「ん？」

「さ、ささ寒くない？」

ふふっ、と笑うような息を感じる。しばらくしたら規則的に寝息っぽい音がしてきた。

うつうつとはじめた時、聞き逃しそうな声が聞こえた。

「せ、背中が寒い」

「背中？」

返事がない。

俺は恐る恐る両手を伸ばして横山を背中からそっと抱いた。

なるべく腰は彼女の体にくっつかないようにして。

逃げないでおとなしくしている彼女の体は柔らかくて、あつたかい。
い。

「あつたかいな」

母ちゃんってこんな感じだったかな。

いつのまにか泣いていた。

横山は何も言わない。ちょっぴり調子に乗りたくなった。

「あのお」

「ん？」

「なんの返事もいらないから、一言だけ、あ、甘えてもいいかな」

声が震え出した俺に、頷いてくれる。

「た………ただいま」

ぼろぼろ泣き出した俺に、横山は黙っていてくれる。

ぎゅっぎゅっ抱きたいのをこらえるよりも、ただ泣いていたいと思っただ。
思った。

消え入りそうな言葉が耳に届く。

「おかえりなさい」

横山は寝返りを打って、俺の頭を撫でる。

俺は涙をこぼしながら彼女の両手を握って寝た。それ以上できなかった。

それがいいことなのか悪いことなのかは知らない。

だけどね。

初めて自分や他人、運命みたいなものを許せたような気がする。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7274z/>

狼になりたい

2011年12月24日10時46分発行